

## 保健指導からみた母と子の諸問題

### 心理相談について

研究第5部 望月 武子

#### I 保健指導部心理相談について

子どもの健全な発達を促し、円満なパーソナリティーの形成をはかるためには、子どもの生活のよりどころとしての家庭や両親、とくに母親が果たす役割は大きい。都市化が進み生活空間や生活形態が変化し、核家族化、少子化など、育児環境は大きく変貌してきている。また、錯綜する豊富な情報や多様化する価値観の中で、親が十分にその役割を果たし、子どもを健全に育てていくことは必ずしも容易でなく、従来にも増して困難な状況にあると考えられる。

保健指導部心理相談では、このような状況下において、母親が我が子にしっかりと目を向け、個々の子どもの発達や特性を理解してその発達を促すことができるよう、また、それぞれが調和的な望ましい母子関係を形成することを援助しようとする意図をもって相談を行っている。

このため、子どものパーソナリティーの発達や母子関係の形成過程からみて、重要な意味をもつ節目として、9か月前後（9か月～10か月）、1歳6か月前後（1歳5か月～1歳9か月）、2歳6か月前後（2歳5か月～2歳7か月）の三時点を選び、来部者全員に心理相談を実施している。それぞれの時点での母と子の問題の心理的な意義としては次のようなことがらを考えている。

##### 1) 9か月前後

この時点では愛着の形成に視点をおき、①母子の情緒的な結びつきができて、母親が子どもにとって特別な人として認識されているか、②母親の存在が子どもに安定感を与え、外界への積極的な働きかけが可能であるか、などについて観察し、③探索活動や母子交渉に対する日頃の母親の態度を確認して、それらの意味を説明するとともに、子どもへの安定したかかわりを促し、信頼感に基いた母子関係を成立するよう努めている。

##### 2) 1歳6か月前後

活動的になり行動領域が拡大するとともに、象徴機能の発達にともない知的活動にも質的な変化がおこる節目

である。この頃から外界とのかかわりの重要な手段として言語が大きな意味をもって来るので、①対人的行動様式に注目して、言語のみでなく、非言語的手段も含めて、相手の意図の理解や相互交渉が可能であるか、②子どもが、経験を拡大していくにあたって、母親との情緒的關係が十分に機能しているかを、場への適応や行動から確認する。そして母親の役割や子どもの発達に即した援助のしかたなどについて話し合いを行っている。

##### 3) 2歳6か月前後

自立と依存の欲求が共存し、この両極に激しく揺れ動くため、親は対応にとまどう時期である。自我の発達にともない、社会化の圧力、友だちとの交渉、弟妹の出生などを巡り、情緒的な安定を欠きやすく、母子関係にもひずみを生じやすい。子どもが自己を認識し、他者を理解し受け容れて、自我領域を拡大していくためには、子どもの立場にたった理解と援助が必要である。子どもの日常的問題を通して、自我の発達の心理的意味を理解するとともに、健全な発達を援助することができるよう働きかけている。

##### 4) 心理相談の方法

子どもには乳幼児簡易検査を実施しながら、その間の行動を観察して発達程度や行動傾向を把握し、同時に母子交渉のあり方を観察する。また、母親の心配や不安について確認しそれに応じるとともに、子どもへの接し方など具体的な助言指導を行っている。

1歳6か月前後の検診には言語発達スクリーニングテストを併用し、2歳6か月前後では日常生活の中で親が扱いに困ったり気になる行動の有無をアンケート方式で確かめて、発達の判定や母子関係の問題を探る手がかりとしている。

そして、発達・行動・母親の養育態度に問題や疑問が認められたり、あるいは将来的に問題を生じる危険性が予測される場合には follow up してその後の発達や母子関係の様態を確認しながら指導を重ねることになる。

follow up の基準については、子どもの発達に関しては乳幼児簡易検査、言語発達スクリーニングテストを用

いている。子どもの行動上の問題や母子関係・養育態度の問題については、親の訴えや行動観察・養育についての相談を通して判断しているが、統一的な判定基準はなく相談者の判断にまかされている。したがって、個々の相談者による差はまめがれないが、比較的臨床経験の永いものが相談に携っていることで極端な逸脱は少ないと思われる。

## II 研究目的及び方法

保健指導部において実施している心理相談についてその実態を報告する。同時に、follow up 対象になった子どもについてその理由、経過などを分析することにより、今日の育児についての母と子の問題を具体的、実証的に把握するとともに、より効果的な診断・指導法を見出し、今後の指導に役立てようとするものである。

分析の対象としたのは、昭和58年度及び59年度に心理相談を受診したもののうち、何らかの理由によりfollow up の対象になったもので、検査結果や相談カルテの記載事項から問題の所在、経過などについて分析を行った。

## III 結果

### 1. 心理相談受診数

昭和58年度、59年度に心理相談を受診したものは表1の通りである。55年に保健指導の体系の中で心理相談を開始して以来受診数は年々増加している。年齢別にみると定期検診として設定している3時点の受診が中心であり、とくに9か月前後と1歳6か月前後の年少時の受診が多い。この時点では公的機関が発行する無料受診券の使用が可能であることが一因である。

定期検診時以外の受診は、定期検診時にfollow upされたもの、あるいは医師、保健婦から心理相談の必要性が認められたもの、母親がとくに希望したものなどであるため、その割合は少ない。また、3歳以後の心理面の

表1 心理相談受診数

年 度 年 齢	58年度		59年度		計	
	N	%	N	%	N	%
0 ; 9 ~ 0 ; 10	942	38.7	975	37.2	1917	37.9
1 ; 5 ~ 1 ; 9	815	33.4	857	32.7	1672	33.1
2 ; 5 ~ 2 ; 7	381	15.6	432	16.5	813	16.1
0	29	1.2	39	1.5	68	1.3
1	91	3.7	139	5.3	230	4.5
2	127	5.2	120	4.6	247	4.9
3	35	1.4	42	1.6	77	1.5
4 ~	17	0.7	18	0.7	35	0.7
計	2437	100.0	2622	100.0	5059	100.0

相談は研究所教養相談室の利用をすすめているので、さらにその割合は低くなっている。

### 2. follow up の割合

心理相談定期検診時に発達、行動上の問題や母子関係、養育態度の問題でfollow upされたものの割合は表2の通りである。年度によりその割合に多少差はあるが、全体的にみると約10%の子どもがその対象になっている。

年齢段階別にみると、1歳6か月前後が最も多く、9か月前後が最も少なくなっているが、9か月前後の時点では養育上の問題があっても子どもの発達や行動の問題として表われるものは未だ少なく、1歳6か月前後では子どもの行動の拡大に伴って心理面の問題が増加することの他に、ことばの発達に関連したfollow upが多くなっていることによるものである。

### 3. follow up の状況

表3は年齢段階別にfollow upの状況をみたものである。一般的傾向を把握するために58年、59年度を合わせて整理集計した。年齢段階別に初回、2回目、3回目……とfollow upされたものの数を示してある。11か月～1歳4か月段階で3回、4回とfollow upを重ねているもの

表2 心理相談定期検診でfollow upの割合

	58 年 度			59 年 度			計		
	受診数	follow up数	%	受診数	follow up数	%	受診数	follow up数	%
0 ; 9 ~ 0 ; 10	945	39	4.1	975	55	5.6	1917	94	4.9
1 ; 5 ~ 1 ; 9	815	133	16.3	857	102	11.9	1672	235	14.1
2 ; 5 ~ 2 ; 7	381	50	13.1	432	44	10.2	813	94	11.6
計	2138	222	10.4	2264	201	8.9	4402	423	9.6

表3 follow up の状況

性	年齢	0;9~	0;11~	1;5~	1;10~	2;5~	2;8~	3;0~	4;0~	計	%
		0;10	1;4	1;9	2;4	2;7					
男	初 回	52	13	117	7	27	3		3	222	55.2
	2 回目	1	16	24	33	15	4	8		101	25.1
	3 回目		4	8	11	12		8		43	10.7
	4 回目~		2	3	10	10	1	9	1	36	9.0
	小 計	53	35	152	61	64	8	25	4	402	
	%	13.1	8.7	37.8	15.2	15.9	2.0	6.2	1.0		100.0
女	初 回	40	8	64	2	17	4	3	3	141	59.7
	2 回目	1	13	15	23	3	1	3	1	60	25.4
	3 回目		1	4	5	8		2		20	8.5
	4 回目~				7	2	1	3	2	15	6.4
	小 計	41	22	83	37	30	6	11	6	236	
	%	17.4	9.3	35.2	15.7	12.7	2.5	4.7	2.5		100.0
計		94	57	235	98	94	14	36	10	638	
	%	14.7	8.9	36.8	15.4	14.7	2.2	5.6	1.6		100.0

が少数みられるのは発達の遅れの著しいものや母親が神経症のため子どもへの対応に不安が認められたものが計7名あったためである。このような短期間で頻度の高いfollow up は例外的ではあるが、同一の子どもについて問題が継続しているため2回、3回とfollow up されることは少なくない。ここでは延べ人数で扱っており、両年度間に延べ638名がfollow up されている。これを性別でみると男児402名、63%、女児236名、37%で、明らかな差がみられ、また、3回、4回と継続してfollow up されるものも男児の方が多かった。

#### 4. follow up 対象児の性別と出生順位

上記のように延べ638名がfollow up されているが、対象児の実数は423名である。これを性別、出生順位でみたものが表4である。心理相談受診者全体の男女比は

表4 follow up 対象児の性別と出生順

性 出生順	男	女	計	%
第1子	197	120	317	74.9
2・3子	64	42	106	25.1
計	261	162	423	
%	61.7	38.3		

男児約52%であり、第1子約67%であるので、follow up の対象児には男児及び第1子の割合が高いといえることができる。

#### 5. follow up の理由

follow up の理由を発達上の問題、行動上の問題、母子関係及び養育態度の問題、その他に大別している。follow up される理由は単一でなく、二領域にわたるものも多いが、ここでは個々の領域にわけて年齢段階別にその内容をみた。

##### 1) 発達上の問題

表5-1は発達上の問題でfollow up されているものについてその内容を年齢別・性別にみたものである。

言語発達の問題を表出言語のみ遅れているものと区別して整理集計した。全体発達と分類されているものは、明らかな知能発達遅滞が認められるものの他、全体的に発達ペースの遅れ気味のものも含まれている。低年齢であるため判定もかなり現象的にとらえられており、9か月時では運動発達の遅れ、1歳6か月時では言語発達の遅れが多い。発達上の問題は延べ382名、受診総数の7.6%になっており、内容的には言語発達に関するものが最も多く、年齢段階では1歳5か月から2歳4か月でのfollow up が多い。これは子どもに発達上の歪みがある場合は言語発達の問題として現われて来ることが多いこと

表5-1 follow up の理由 発達上の問題

年 齢	理解言語 表出		表出言語		全体発達		運 動		そ の 他		小 計		計 %
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
0 ; 9 ~ 0 ; 10					20	8	12	17			32	25	57 (8.9)
0 ; 11 ~ 1 ; 4					15	5	4	3	1	1	20	9	29 (4.5)
1 ; 5 ~ 1 ; 9	35	13	55	19	20	10	3		1		114	42	156 (24.5)
1 ; 10 ~ 2 ; 4	11	7	25	7	13	2	1				50	16	66 (10.3)
2 ; 5 ~ 2 ; 7	10	3	17	2	6	1	1				34	6	40 (6.3)
2 ; 8 ~ 2 ; 11	2	1	2	2	1	2					5	5	10 (1.6)
3 ; 0 ~ 3 ; 11	6	1	6	2	6	1					18	4	22 (3.4)
4 ; 0 ~			1			1					1	1	2 (0.3)
小 計 follow up 数との比	64 (15.9)	25 (10.6)	106 (26.4)	32 (13.6)	81 (20.1)	30 (12.7)	21 (5.2)	20 (8.5)	2 (0.5)	1 (0.4)	274 (68.2)	108 (45.8)	follow数 男 402 女 236
受 診 計 受診数との比	89 (1.8)		138 (2.7)		111 (2.2)		41 (0.8)		3 (0.1)		382 (7.6)		受診総数 5059

と、親が最も気がつきやすく心配になりやすいためと考えられる。

これを性別でみると全般的に男児が多く、とくに表出言語では男児が目立って多くなっており、実数では約3倍、follow up 数との比でみても約2倍になっている。知能発達に遅れがなく、表出言語のみの遅れの場合は発達の個人差と考えられるケースも多いが、母親の心配もあり発達経過確認のため follow up されるものも少なくないためであろう。

## 2) 行動上の問題

表5-2は行動上の問題の内容をみたものである。動きが激しい、母親からの分離不安などはこの時期の子どもの一般的傾向ではあるが、程度が激しくそのために母親を困惑させ、不安を抱かせるなど、子どものパーソナリティーの発達や母子関係の発達に影響を及ぼすおそれのあるものが follow up される。したがって、問題行動の程度だけでなく、その行動を母親がどう受け止めて、どう対処しているかということも follow up の要否の判定に加味されてくる。

行動の分類は事前にカテゴリーが決められていたものではなく、カルテの記録に基づいて分類を試みたが、次のような内容が含まれている。

多動……動きが激しい、危険の認識がなくとび出す、動きが予測できないので目が離せないなどの訴えと、面接場面での行動所見に多動、おちつきなしなどの記録があるもの。

働きかけに応じにくい……他からの働きかけに対応した反応が少なく、他の人のいうことに耳を貸さない、動作に注目しないなど、対人関係の希薄さや一方通行的な関係が疑われるもの。

消極性……極端におとなしく不活発なもの、警戒心が強く自己活動の生起が弱いもの。

排泄問題……2歳を過ぎていて、排泄の問題で親が焦るなど、母子関係の調和を乱しているもの。

その他……チック、オナニー、夜泣き、吃音などの問題やその他の情緒的問題を含む。

行動上の問題で follow up されているものは延べ311

表5-2 follow up の理由 行動上の問題

年 齢	多 動		働きかけに 応じにくい		分離不安 不適応		消極的		排泄問題		退 行		その他		小 計		計 %
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
0 ; 9 ~ 0 ; 10	4	2	2		2	4	7	3					1	1	16	10	26 (4.1)
0 ; 11 ~ 1 ; 4	3	2	1	1	3	2	2	2					1		10	7	17 (2.7)
1 ; 5 ~ 1 ; 9	14	3	25	15	15	10	3				2	1	7	6	66	35	101 (15.8)
1 ; 10 ~ 2 ; 4	8	3	15	9	1	3		1	2	1			1	5	27	22	49 (7.7)
2 ; 5 ~ 2 ; 7	8	5	5	2	5	4	1		14	4	3	3	4	6	40	24	64 (10.0)
2 ; 8 ~ 2 ; 11	2	1	2	1	1				1	2			2	1	8	5	13 (2.0)
3 ; 0 ~ 3 ; 11	3	1	7	1	2	1			4	2	2	1	5	3	23	9	32 (5.0)
4 ; 0 ~	1	1						1			1		2	3	4	5	9 (1.4)
小 計 follow up 数との比	43 (10.7)	18 (7.6)	57 (14.2)	29 (7.2)	29 (7.2)	24 (10.2)	13 (3.2)	7 (3.0)	21 (5.2)	9 (3.8)	8 (2.0)	5 (2.1)	23 (5.7)	25 (10.6)	194 (48.3)	117 (49.6)	follow数 男 402 女 236
計 受診総数との比	61 (1.2)		86 (1.7)		53 (1.0)		20 (0.4)		30 (0.6)		13 (0.3)		48 (0.9)		311 (6.1)		受診総数 5059

名、受診総数の6.1%に当たっている。最も多いものは他からの働きかけに対応反応の少ないもので、1歳5か月から2歳4か月段階に目だって多く、ついであげられる多動も1歳5か月から2歳7か月段階に集中している。

これらの行動特徴をもつものの約40%が言語発達遅滞を併せもっており、また、働きかけに対応反応の少ない86名のうち約30%が多動傾向をも示している。これらのことから、一般的な子どもに比べ、ことばへの関心が弱く、子どもの内的な要求の強さに比し、大人からのことばによる行動のコントロールが弱いことが考えられ、運動面、情緒面、言語面の発達のアンバランスから生じる発達のひずみによるものではないかと考えている。これについては、今後改めて検討を要する問題であるが、このような行動傾向をもつ子どもの母親の訴えに、いうことをきかない、トイレをいやがる、かんしゃくが強い、いたずらが激しい、他の子どもに乱暴する、迷子になるなどが目立ち、親が疲労や混乱をみせていることからみても、母親にとっては扱にくい子どもであり、望ましい母子関係の形成を阻害するおそれがあるものではない

かと考えられる。

次に多いものが母親からの分離不安がつよく、子どもの要求に応じかねて母親もストレスを高めたり、不安を感じているものである。そのため、子どもへの対応に適切さを欠き、子どもの不安をいっそう強めている例が少なくない。

いずれの場合も、子どもの行動の意味を理解することが困難で、その行動にとらわれすぎて行動のみ抑えようとしたり、子どもの行動にふりまわされてしまいやすいため、ますます母子間の交流に齟齬を生じやすい。

### 3) 母子関係・養育態度の問題

表5-3は母子関係・養育態度の問題についてその内容を分析したものである。相談カルテの記録をできるだけ重視しながら集約、分類を試みた。母子関係・養育態度でfollow upされたものは延べ332名、受診総数の6.6%である。発達上の問題では男児が明らかに多く、行動上の問題でも男児に多い傾向がみられているが、ここでは子どもの性による差はみられない。

母子関係・養育態度の問題でfollow upされた332名

表5-3 follow up の理由 母子関係・養育態度

年 齢	要求強く 干渉多		焦 り 不 安		つき放 し拒否		交渉不足 絆弱		子どもの救 わがらぬ		対 応 不安定		過保護		自信が ない		母の精 神衛生		家族の 問題		小 計		計 %
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
0:9~0:10	2	2	1		2	2	10	10	1	1	3			1	1	3	2				23	18	41 (6.4)
0:11~1:4	1	1			1		3	5	2	1	1	1	1	1	1	5	3	1			16	12	28 (4.4)
1:5~1:9	14	17	1	2	4	1	29	23	4	4	5	5	3	1	2	2	3	4	3	2	68	61	129 (20.2)
1:10~2:4	6	7	3		3		9	2	2	1	2	3	1	1	1	2	1	1	1	1	27	19	46 (7.2)
2:5~2:7	11	10	1		2	3	11	1	1		1	6	1	1	1	2	1	2	1	32	24	56 (8.8)	
2:8~2:11	2	2	1				1									1		1		6	2	6 (0.9)	
3:0~3:11	2	3			1	1	2	1				1	1	1	1	2	1	1	1	10	9	19 (3.0)	
4:0~	1	1		1															2	1	4	5 (0.8)	
小 計	39	43	7	3	10	10	65	42	10	7	12	7	6	6	18	9	183	149	183	149	183	149	follow数 男 402 女 236
follow up 数との比	(9.7)	(18.2)	(1.7)	(1.3)	(2.5)	(4.2)	(16.2)	(17.8)	(2.5)	(3.0)	(3.0)	(1.7)	(1.5)	(1.3)	(4.5)	(3.0)	(45.5)	(63.1)	(45.5)	(63.1)	(45.5)	(63.1)	
計 受診数との比	(1.6)	(1.6)	(0.2)	(0.2)	(0.4)	(0.4)	(2.1)	(2.1)	(0.3)	(0.3)	(0.6)	(0.6)	(0.2)	(0.2)	(0.6)	(0.6)	(6.6)	(6.6)	(6.6)	(6.6)	(6.6)	(6.6)	受診数 5059

のうち、107名までが子どもとの交渉不足や母子関係の希薄さが心配されるもので、最も多くなっている。これらはことばの遅れ、全体発達遅れと関連して follow up されているものが多く、乳児期から自立心の育成を考えすぎるために一人遊びを重視しすぎたり、子どもの発達にかかわる親の役割への認識が不十分のため要求の少ないことを良いこととしてしまうなどの傾向がみられる。また、母子関係・養育態度の問題で follow up されているものは、332名中271名、82%までが第1子の養育に際しており、2子、3子は少ないが、交渉不足を心配されるものについては2子が30%を占めていて、その割合が高いのが特徴である。第1子である兄・姉の養育に目を奪われて、2子である本人は人まかせになるなどもあり母親との交渉が不足するものである。

次いで多いものが、大人の立場からの要求の押しつけで、子どもの行動をコントロールしようとして干渉が多いタイプである。これは子どもの行動が活発になる1歳5か月以降に目だっている。そして、多動や働きかけに対応反応が少ないなど行動上の問題との関連が強くなっている。このようにみると親の養育態度が子どもの問題をひきおこし、子どもの問題が親の養育態度に影響を及ぼしているというように、相互に関係しあっている

ことが明らかである。

母親の精神衛生という項目に分類してあるものの中には、母親の神経症(4名)、うつ傾向(2名)のため、神経科で治療中のものが含まれており、他に母親自身が情緒的に不安定なもの、どうしても子どもに愛情がもてないと訴えるものなどがある。

また、子どもが苦手で扱いにとまどうもの、自分の育児に自信がなく常に不安を抱くものなど、少数ではあるが、社会の今日的な問題を反映している。

#### 4) 子どもの問題と養育態度

表5-4は follow up の理由が子どもの問題と母子関係・養育態度の問題の双方にチェックされているものについて、両者の関連をみたものである。

すでに母子関係・養育態度の項で少しづつ触れたように、養育態度と子どもの問題には強い関連がみられている。

発達上の問題からみると、子どもとの交渉が少なく絆の弱さが心配されるものが目立って多く、とくに言語発達との関連が強い。子どもとの交渉が不足して母子関係が希薄であれば、子どもの発達を促進することはむずかしく、とくに大人との交渉を通して学習する言語発達への影響が大きいことは当然であろう。しかし、このよう

表5-4 子どもの問題と母親の態度

子どもの問題		要求強 干渉多	焦 り 安	つき放 し拒否	交渉少 絆弱い	子どもの 扱知らぬ	対 応 不安定	過保護	自 信 し	母の精 神衛生	家族の 問 題
発達 の 問 題	理 髪 表 全 運	11			26	2	1	2		2	
	解 出 体	12	1		21	1		2	1	5	2
	言 言 発 達 動	2	2		20	2			1	1	
			1		3	1				1	
行 動 の 問 題	多 働 き か け に 応 じ に く い	14		1	13	2	6	1			
	分 離 不 安 性	20			21	5	1			1	
	消 極 性 問 題	10	2	3	5		4	3	1	3	2
	排 泄 問 題	4	1	1	3	2		1		1	
	退 そ の 他	3	1	2			3		1	1	
	9		3	2		4		1	6	3	

な母子交渉の不足を心配されるケースの中には、発達が遅く、親への働きかけが弱いというような子ども側の要因があることも事実である。

また、表にみられるように大人からの一方的な意図で子どもの行動を規制しようとするかかわりが、言語発達にマイナス的な影響を及ぼすのではないかとすることも考えられる。

つぎに、子どもの行動上の問題と養育態度の関連をみると、働きかけに無関心で対応した反応を示しにくい子ども・多動傾向を示す子どもに対する親の態度は大人の意図からの要求や干渉が強い養育態度と、交渉が少なく絆の弱さが心配される母子関係とに二分されている。一方は、親からの働きかけを無視してマイペースで行動する子どもに対し、親も不安を感じてその行動を規制しようとして強圧的に干渉したり、混乱して感情的に叱ることが多くなり、もう一方は、働きかけを放棄して子どものやりたい放題にまかせてしまうということが推測される。いずれにしても、母親の存在が子どもにとって快いもの、重要なものになることを妨げる危険性を有するものとみることができる。

また、分離不安や不適応反応を示す子どもに対し、親は焦り、不安を強めて、大人の意図を押しつけたり、つき放したり、不安定な対応を示しやすいことがわかる。

#### 6. follow up 後の経過確認状況

follow up 対象児がその後どのように経過しているか、60年3月現在での確認状況を示したものが表6である。58年、59年について年度別に示してあるが、58年度のfollow up 対象児でも1年余り経過しているにすぎず、59

年度ではまだ次の経過が確認できていないものが多い。比較的時日を経過した58年度についてみると、延べ330名のfollow up があるが、9か月前後のfollow up 対象児については97%、1歳6か月前後の対象児では81%、全体としては69%のものについて一応経過が確認されている。2歳6か月以後の確認率が低いのは、教養相談室での受診を勧めていることと、年長になるほど受診率が低くなっていることによるものであろう。

このうち、問題が軽減されfollow up を解かれているものは9か月時にfollow up された39名のうち22名、56%、1歳6か月時にfollow up された133名中の40名、30%がめだっている。

9か月時点の対象児で、問題解消あるいは軽減されたものの中では、運動発達の遅れに関するものが13名で最も多く、1歳0か月時点で8名、1歳6か月時点で5名がfollow up を解かれている。急速に発達の遅れが解消されたものと、親が子どものペースを理解して対応し不安が軽減されているものが含まれている。この他、全体的に発達の遅めのもの3名、子どもの反応が不活発なもの3名、母親が神経質で育児に不安をもつもの2名などがあり、多くは1歳6か月までにfollow up を解かれており、歩行を開始すると子どもの様相も変化し、親の不安も軽減することが多い。

1歳6か月時点のfollow up 対象児のうち、問題軽減されたものが40名あるが、このうち23名までが言語発達に関するものである。その他、分離不安や場への不適応行動が激しかったもの7名、養育態度に問題があったもの4名、全体に発達が遅めであったもの3名などがある。

表6 follow up 後次回結果確認状況

年度	年 齢	follow数	結果確認できたもの		できないもの	問 題 解 消
58 年	0 ; 9 ~ 0 ; 10	39	38	97.4 %	1	22
	0 ; 11 ~ 1 ; 4	27	20	74.1	7	1
	1 ; 5 ~ 1 ; 9	133	108	81.2	25	40
	1 ; 10 ~ 2 ; 4	49	33	67.3	16	5
	2 ; 5 ~ 2 ; 7	50	20	40.0	30	8
	2 ; 8 ~ 2 ; 11	11	2	18.2	9	
	3 ; 0 ~ 3 ; 11	15	4	26.7	11	
	4 ; 0 ~	6	2	33.3	4	1
	計	330	227	68.8	103	77
59 年	0 ; 9 ~ 0 ; 10	55	30	54.5	25	11
	0 ; 11 ~ 1 ; 4	30	9	30.0	21	4
	1 ; 5 ~ 1 ; 9	102	45	44.1	57	22
	1 ; 10 ~ 2 ; 4	49	13	26.5	36	1
	2 ; 5 ~ 2 ; 7	44	10	22.7	34	2
	2 ; 8 ~ 2 ; 11	3			3	
	3 ; 0 ~ 3 ; 11	21			21	
	4 ; 0 ~	4			4	
	計	308	107	34.7	201	40

言語発達の問題が解消あるいは軽減されたもの23名についてその内容を吟味してみると、1歳6か月の健診時に行っている乳幼児簡易検査の結果では発達に遅れが認められないものが17名、テストに依拠していないもの4名、発達にやや遅れがみられるものが2名あった。

これを言語発達スクリーニングテストの結果からみると、理解言語・表出言語ともに遅いもの7名、表出言語のみ遅いもの10名、正常発達範囲内と判定されるもの5名、未施行1名であった。

この両者のテスト結果からみて、問題が解消あるいは軽減したのものには、知能発達には異常がなく、表出言語に遅れがみられるケースが多いことがわかる。

また、follow up を解いた時期をみると、13名が2歳0か月、8名が2歳6か月、2名が3歳になっており、僅かな期間で問題解消しているケースもあるが、その間母親もことばの遅れをくり返し訴えるケースもあり、follow up の必要性がなかったとはいえない。

#### おわりに

心理相談での follow up の経過は、その子どもの発達や母親自身または、母子関係にかかわる問題で、極めて

個人的な意味あいの強いものである。したがって、個々の事例を掘り下げ指導とその経過の関連を細かく検討することに大きな意味があり、今回のように数量的に扱うことには無理な点が多い。それをあえて行ったのは、集約することにより現在の育児にかかわる問題を実証的にとらえ、保健指導の場で活かしていこうと考えたからである。

保健指導の立場から考えれば、母と子の問題が拡大され、明瞭になってからそれに対応するのではなく、問題を生じる危険性が予測される場合にはそれを未然に防ぐことが必要であり、そこに保健指導における心理相談の重要な意義があると考えている。

#### IV 要 約

保健指導部心理相談についてその実態を報告し、何らかの問題で follow up されたケースについて、その問題を検討した。

心理相談受診数は58年度2437名、59年度2622名で、相談開始以来年々増加の傾向がみられている。

定期検診として設定されている3時点で、何らかの問題や問題発生の危険を予測して follow up されたものは



約10%にあたり、58年度は延べ330名、59年度は延べ308名が follow up されている。

follow up されたものは男児が多く、第1子が多い。

follow up された理由は、発達上の問題が382名、全受診者の7.6%、行動上の問題311名、6.1%、母子関係や養育態度によるもの332名、6.6%である。

発達上の問題では言語発達に関するものが最も多く、男児が明らかに多い。

行動上の問題では多動傾向を示すもの、人からの働きかけを無視し対応反応の少ないもの、分離不安が激しく不適応を示すものが多い。

母子関係・養育態度の問題では、母子の交渉不足を心配されるものが最も多く、また一方では親の要求の押しつけや干渉過多が目だっている。少数ではあるが母親が

精神的に不安定なもの、育児に不安をもつものが見られる。

これらの母子関係や養育態度の問題は、子どもの問題との関連が強く、母子の交渉不足は言語や人からの働きかけへの対応行動の発達を促進しにくく、要求の押しつけや干渉過多は多動傾向や人からの働きかけに対応反応の少ない子どもに目だっていた。この場合いずれが原因とはいい難く、発達の流れの中で相互に関連しあっているものである。

58年度では、330名中227名、69%が follow up の経過が確認されている。そのうち問題が軽減されて follow up を解かれたものは77名であり、9か月時点の対象児では運動発達に関するもの、1歳6か月時では言語、とくに表出言語に遅れがあったものに問題が軽減されたものが多かった。

## Study on Problems in Regard to Mothers and Their Children : Psychological Guidance

Takeko MOCHIZUKI

In this study, the actual situation in reference to psychological interview in Dept of Health and Development Guidance was reported, and the problems of followed up cases were analysed.

Psychological guidance has been increasing in number year after year since this guidance section was opened. At 9 months, 1.5 years and 2.5 years of ages which were appointed as the periods of regular health check, about 10% of all the children were followed up as having or being in danger of some problems. There were 330 followed up cases in 1983 and 308 cases in 1984.

Boys were more followed up than girls and eldests were large in number among followed up children. The most marked reason for follow-up was developmental problem (382 children), the next was problem in regard to mother-child relationship and mother's child care attitude (332 children), and behavioral problem (311 children).

As for the developmental problem, language and speech development problem was found the most, particularly in boys. As for the problem in regard to mother-child relationship and mother's child care attitude, the problem of insufficient mother-child interaction was the most, while the cases of forcing mother's demands to her child or mother's over-interference with her child were conspicuous. As for the behavioral problem, more cases of hyperaction, disregard for human relationship and strong separation anxiety were noticed.

These problems seem to be connected with one another, e.g. insufficient mother-child interaction tended to arrest the development of language, speech and interpersonal reactive behavior: and in the children who were hyperactive or disregarding human relationship, their mothers' tendencies of forcing their demands to them or over-interfering with them were distinctive. It was hard to decide which was the cause or the result in the process of child development.

In 1983, the process or the result of the follow-up of 227 children, 69% of 330 followed up ones were checked up. The follow-up of 77 children of 227 ones were closed because of the mitigation of their problems, among which motor development at 9 months of age and language and speech development at 1.5 years of age were mainly confirmed to be improved.